

ai. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, jav. *abda-*, *dapta-*,
及び ai. *addhā*, aav. ap. *azdā*

後 藤 敏 文

1. 古インドアーリヤ語 [ai.] *ádbhuta-* 「不思議な, 驚異の」はリグヴェーダ [RV] 以来普通の語で, 仏典では「奇, 希有, 奇特, 殊勝, 未曾有」などと漢訳される. アヴェスタ語 [av.] *xratōuš... yōm naēčiš dābaiie'tī* 「誰もそれを欺く [こと] が」ない精神力 (Y 43,6) が RV *ádbhuta-kratu-* 「驚異の (欺き得ない) 精神力を持つ」の言い換えと見られることから, *ádbhuta-* が ai. *dabh*, av. *dab* 「欺く, [策略によって] 損害を与える」に由来することは明白である.¹⁾ 「驚異の」等の意味は「欺かれぬ, 動かし難い, 紛れもない」を経たかと思われるが確認はできない.

RV には 24 回単独で現れ, Agni をはじめ神々に用いられる. *turīpa-* 「精液」が「不思議な, 驚異の」と形容され²⁾, X 105,7 には *ádbhutam ná rájah* 「神秘の暗闇のように」が見られる. 形容詞は中性形で, もの, こと, 状態を表すが, *ádbhuta-* にも, I 170,1 *kás tād veda yád ádbhutam* 「誰がその驚異を知っているか」, I 77,3 *mitró ná bhūd ádbhutasya rathīḥ* 「Mitra のように, [Agni は] 驚異 [を操る] 御者となる (cf. HOFFMANN Injunktiv 214f.)」が見られ, I 125,11 には複数形 *áto víšvān y ádbhutā¹ cikivām abhī paśyati | kṛtāni yá ca kárt,vā* 「ここに, 為された, そして為されるべきものたちであるあらゆる驚異たちに気づきながら, [Varuṇa は] 監視している」がある.³⁾

á-dbhuta- は Determinativkompositum (Karmadhāraya) と判断されるが, *adbhuta-* (アクセント位置からは Bahuvrīhi) も現れる: I 120,4 *vi pṛchāmi pāk,yā ná devān¹ váṣat-kṛtasya ádbhutásya dasrā* 「素朴に, 私は [他の] 神々を問いたさない, *váṣat* の発声をなされた驚異の [Soma] について, 超能力ある [両 Aśvin] よ」. 二次的語形の背景には, 詩人の解釈が絡む可能性がある. 即ち, 「欺瞞によって損なわれない」に由来する *á-dbhuta-* を「欺きを持たない, 欺かない」という能動的意味に用いれば Bahuvrīhi となる. この場合 *dabh* 「欺く」が依然意識されていたことになる.

複合語 *ádbhutainas-* は原義の残存を確実に示す. 「驚異の罪過を持つ」は意味を

成さず, 「その人・ものにとっては, 罪過が *ádbhuta-* である」, 「[[その者の前では] 罪過をごまかせない」と解される. 2 例とも補遺スークタ中にあるが, 依然原義が意識されていたことを証する: VIII 67,7 *ádiyā ádbhutainasah* 「[その前で] 罪過を欺き減らすことのできない (ごまかせない) 者たちだ」.⁴⁾

2. 同じく, 否定辞 *á-* と VAdj. から成る語に⁵⁾ *á-dabdha-* があり (**dabdhá-* はない), 原義に近い「欺かれぬ, 欺瞞によって損なわれぬ」を意味する.⁶⁾ RV に 48 回見られ, マントラの言語層に属する語彙である. 「欺きたくない」監視者などについて言われ, 文中に用いられる動詞にも「守る, 監視する」が多い. 例えば, I 24,10 *ádabdhāni varuṇasya vratāni¹ vicākaśac candrāmā náktam eti* 「Varuṇa の掟たちは欺かれぬ. 月は夜, 見張りながら行く」.

3. *dabh* の VAdj. には, 本来 **-d^h-b^h-ta-* から BARTHOLOMAE の法則を経た **-dbd^ha-* が期待されるが, 3 破裂音連続は保持されないので, 脱落による不明瞭化を回避すべく *á-dbhuta-* は *-u-* を挟み, *á-dabdha-* は Vollstufe の語根を導入している (cf. VAdj. *-labdha-*: *labh* 「つかまえる」). しかし, 新アヴェスタ語 [jav.] には *a-bda-* があり, まさしくインドイラン祖語 **-dbd^ha-* から, *d* が Dissimilation により消滅した形を示す. 従って, インドイラン祖語における **-dbd^ha-* の存在は確かである. BAILEY apud GERSHEVITCH Fs.Pagliario II (1969) 181, NARTEN Yasna Hapt. (1986) 202³⁷ はこれを指摘し, HINTZE Der Zamyād-Yašt (1994) 103-106 が詳しく論じているが, 問題は尽くされていない. jav. *abda-* は「素晴らしい」ほどの意味で用いられ (cf. *wonderful*), ai. *ádbhuta-* 「不思議な, 驚異の」に近い派生的語義を示す.⁷⁾ jav. *dapta-* 「欺かれた」は ai. (*á-*)*dabdha-* に対応する (*-ta-* はイラン語に多い morphophonetisch な明瞭化).⁸⁾

4. 従ってまた, インドイラン祖語段階には, *PaP* (*P*: 破裂音) という構造の語根に, *P* の前でも規則通りの弱形 *PP* があつたことになる.⁹⁾ 明瞭化が図られなければ, ai. には **á-ddha-* か **á-bdha-* が予想される. ai. *á-dbhuta-* は語根の子音要素と VAdj. の形態 *-ta-* とを救うべく *-u-* が導入された結果であるが, *-u-* は現在語幹 **db^h-náy⁻¹⁰⁾* を Infix-Präs. (**db^h-ná-y-*) と再解釈することにより抽出されたものである¹¹⁾.

本来の語義「欺かれぬ, 騙されない」は jav. *dapta-*, ai. *á-dabdha-* に, 派生的語義はより古形を残すと思われる *a-bda-* 「素晴らしい」, *á-dbhuta-* 「不思議な, 驚異の」に担われたことになる.

3 破裂音連続 **-dbd^h-* はイラン語派では *-bd-* に異化省略されるが, インド語派が

(230) ai. *ádbhuta-*, *ádabdhā-*, jav. *abda-*, *dapta-*, 及び ai. *addhá*, aav. ap. *azdā* (後 藤)

辿ったであろう道筋は確定できない。**áddha-*の可能性もあるため、似た形を持つ副詞 *addhá* 「明らかに」を検証しておきたい。

5. ai. *addhá* と aav. *azdā*, 古ペルシャ語 [ap.] *azdā* は、一般に名詞 **ad^h-tā-* (厳密には BARTHOLOMAE の法則が働く) 「確証, 通知」の Instr. に由来すると解され、インドイラン祖語 **ad^h* 「言う, 語る」に帰せられる: MAYRHOFFER EWAia II 64 (1992) s.v., SZEMERÉNYI Sprache 12 (1966) 202–205 = Scr.Min. 1867–1870, cf. LIEBERT Nominalsuffix *-ti-* (1949) 182¹. KÜMMEL Perf. im Indoiran. (2000) 117 s.v. *ah* (**adh*) ‘sagen’ に至っては、この語源説から逆に語根の意味を「知らせる, 意見を言う」であると主張している; Lexikon der indogermanischen Verben [LIV] 222 s.v. **Hed^h-* ‘sagen’ もこれによる。SZEMERÉNYI はイラン語形を別起源の名詞と主張するが根拠がない。昔からの語源説 (SZEMERÉNYI 204 によると, GRASSMANN, RENOU, MAYRHOFFER KEWA) に戻るべきであろう。

ai. *addhá* 「はっきりと, 明確に」は RV には 6 回現れる。例えば, X 111,7 *á yán náksatram dádrše divó ná¹ púnar yató nákir addhá nú veda* 「もし, 天の天体 (太陽) が見えてきていないならば, 誰も, 今, はっきりとは知らない, [それが] 再び進み行く [かどうか] を」.¹²⁾ Śatapatha-Brāhmaṇa には *as*, *bhū* を伴う述語副詞構文が見られる。¹³⁾

ap. *azdā* も *bav* 「なる」, *kar* 「する」とともに述語副詞構文を作る。*azdā kušuvā* 「君は [自らの中に] はっきりとせよ」(Iptv. 2.Sg. Med., poss.-affektiv) は, *azdā* が SZEMERÉNYI の言うような名詞ではあり得ないことを示す。¹⁴⁾

aav. *azdā* は他に用例のない *zūtā* と挿入文を作っており, 必ずしも意味は明瞭ではないが, Ap., 中期イラン語諸方言の証拠から, 副詞「はっきりと, 明確に」と考えて問題はない。¹⁵⁾

結論として, 問題の語はインド, イラン両語派を通じて, 「はっきりと, 明確に」を意味する副詞である。Eleph.-Pap. *ʾzdkr* (= ap. **azdākara-*), Turfan mp. *azdēgar* 「告知者」は「はっきりとさせる者」を意味する。Arm. LW *azd arnel* ‘kund machen’, *azd etew* ‘es wurde kund’ (cf. HOFFMANN Aufs. 342, SZEMERÉNYI 204) も同様。もし Chr.Sogd. *ʾzd*, *ʾyzt*, Buddh.Sogd. *ʾzt* が実際単独で「報告」を意味するならば, **azdā-kara-* からの再解釈に基づくものと判断されよう, cf. Chr.Sogd. *ʾzd ʾqry* ‘revelation, announcement’ (<**azdā-kara-jā-*, GERSHEVITCH Gramm. Manich. Sogd. 171). SZEMERÉNYI は Vessantara-Jātaka *kō (ZY) L’ ʾzt’ ʾt* を “**yadi naiy azdā ahatiy* ‘if there be no news (to you)’” と説明するが, 述語副詞の構文を想定すれば, 「はっきりして

いないかもしれないが」という直訳に問題はない。

問題の語を **ad^h-tā-* の Instr. から導く場合、語根名詞 **ád^h-*「言明」+接尾辞 *-tā-*、さらに、アクセント移動による副詞への転換を仮定する必要がある、cf. ai. Instr. *puruṣātā*「人々の仕方で、人々の間では」、一次接尾辞 *-tā-* (**ad^h-tā-*) を仮定すれば Adv. (< *Instr.) *dakṣiṇā*「右側に」:: *dákṣiṇa-*, *ubhayā*「両様に」:: *ubháya-* が参照される。さらに、**b^hauH*「なる」、**kar*「する」との構文は *sūlā kar*「串刺しにする」、*dívā as/bhū*「昼である・になる」(HOFFMANN Aufs. 350–355) のように理解される。

しかし、存在が確認できない名詞の Instr.*「証言をともなつて」>*「周知の、確認された」>「はっきりと」という展開より、代名詞 **ad*「これ」+副詞接尾辞 **-d^hā* から導く方が自然である:「このとおり」、cf. *katidhā*「何重に、何カ所で」、*caturdhā*「4重に、4通りに」。この接尾辞はイラン語派には十分には確認されないが、語根名詞 **d^héh₁-*「決定」の Instr. に遡るであろう (cf. SCARLATA Wurzelkomp. imRV, 1999, 265f.).¹⁶⁾

- 1) HOFFMANN Fs. Sommer (1955) 80 = Aufs. 52¹ (「手出しのできない精神力」). MAYRHOFER Etym. Wb. d. Altindoar. [EWAia] I 64, 806, 695 参照。
- 2) I 142,10 *tán nas turípam ádbhutam ... tváṣṭā pōṣāya ví syatu¹ rāyé nábhā no asmayúh*「Tvaṣṭar は我々のこの不思議な精液 *turípa-* を ... 繁栄のために放て、富のために、我々の臍 (の中) に、我々を思つて」。
- 3) HUMBACH Kratylos 32 (1987) 51 は *ádbhutā* を **ádbhuti-* “Nichttäuschen, Nichtgetäuschtwerden” の Lok. と主張。MAYRHOFER EWAia I 806, II 695 これに従う。
- 4) GE は *ádbhutaínasah* を *ánāgasah* と同格、*ádiyāh* を Vok. に取り、「罪過が認められない者にとって」とする。さらに V 87,7.
- 5) *án-ati-dbhuta-* は *-dbhuta-* が過去分詞 (VAdj.) に遡ることを証する (cf. STRUNK Nasalprä. 66). 否定辞 *á-* + VAdj. が「…され得ない」を意味し、事柄として Gerundiv と重なることについては HOFFMANN Aufs. 191⁵ 参照。
- 6) *ádbhuta-*「驚異の」と *ádabdha-*「欺かれ(得)ない」の並出例: IV 2,12 *kaviṃ śásāsuh kaváyó¹ dābdhā¹ nidhārayanto dūr.yās^v āyóh¹ átas tvám dṣyām¹ agna etān paḍbhīh¹ paṣyer ádbhutām aryá évaiḥ*「欺かれることのない見者たちは、見者に命じた、[彼を] Áyu の戸口 [ごとに] に設置しながら。だから、君は、Agni よ、(Áyu の子孫たちの間にいる見者として) ここにいる見るべき者たち (人間) を [その] 足たちとともに、驚異の部族民たちを [彼らの] 歩み (植民活動) たちとともに見てほしい」。 *aryás* を「部族に属す

(232) ai. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, jav. *abda-*, *dapta-*, 及び ai. *addhá*, aav. ap. *azdā* (後藤)

る者] という意味の *ari-* の Akk. Pl. と解した。

- 7) Vid 2,24 *parō* ⁺*zəmō* (GE *zimō*) *aētaǰhā* ⁺*daǰhēuš* (GE *daǰhuš*) *aǰhat bər*²⁰*tō vāstrēm* ¹*təm āfs pa*^r*ruua vaza*⁺*dīiāi* ¹*pasca vītaxti vafrāhe* ¹*abdaca ida yima aǰ*^h*e astuu*⁺*te sadaiiāi* ¹*yat ida pasēuš anumaiiehe padām vaēnā*⁺*te* 「牧草地を支えるこの土地に、[季節が] 冬の前になるであろう。この[冬の] 後には、雪塊の融解によって水が多く導かれることになる。そうすると、Yima よ、ここには肉体を持つ存在に素晴らしいことが現れ出ることになろう、ここに鳴き声をたてつづける家畜(羊)の足跡を人が見ることになるという」、Yt 5,34 *yōi hān kāhrpa sraēšta* ⁺*zazā*⁺*te* ⁺*gaēθaiiāi tē* ⁺*yōi abdō.tāme* 「美しい身体をもって、[肉体を持つ] 生き物たちのために身をもたげる(立ち上がる)、最も素晴らしい両女性」、Yt 19,10 「素晴らしい多くの[被造物たち]」。
- 8) Y 10,15 *auaǰhər*⁺*zāmi* ⁺*jantiōis* (GE *janaiiaōs*) *ūnqm* ¹*m*^r*riiāiā* *əuuitō*.*xarōdaiiā* ¹*yā* ⁺*m*^a*ni*⁺*ie*⁺*te* (^x*mainiieinti*) *dauuaiēnti* ¹*āθrauuānəmca haoməmca* ¹*hā yā dapta apanasie*⁺*ti* ¹*yā tat haomahe draonō* ¹*nigāǰhānti* ⁺*nīšidā*⁺*ti* (^x*nīšhadaiti*) ¹*nōit tqm āθrauuō*.*puθrim* ¹*naēōda* ⁺*daste* (GE *dasti*) *hupuθrim* 「私は放っておく(無視する)、[その] 女の欠陥を、祭司と Haoma とを欺いているつもり、[自ら] 欺かれて滅び行く、Haoma のその分与を食しながら座る、絶え間なく叫んでいる(?) ならず者の [欠陥を]、Haoma はその女を、祭司の息子たちをもつ者へと、また、よい息子たちをもつ者へと定めぬ(しない)」。
- 9) 語根 *dagh* 「(完全には届かず) そこまで達する」の Präs.Opt. *daghnyāt* 「外れてほしい」KS-KpS^p が参照される(規則通り Nullstufe ならば ^{*}*dghnyāt* または ^{*}*kṣnyāt*)。インドイラン祖語における語根 ^{*}*d^hag^h* (uridg. ^{*}*d^heg^{wh}*) の弱形は、これも古アヴェスタ語 [aav.] Y 28,3 *xšaθrəm*^{cā} *aǰzaonuuumnəm* 「そして、外れる(しくじる) ことのない支配」に証される: *a-yzāonuuumna-* (^{*}*a-yzānuuumna-*) < ^{*}*g^{wh}anū-amna-* < ^{*}*g^{wh}b^hny-ṃh₁no-* < ^{*}*d^hg^{wh}b^hny-ṃh₁no-* (KLINGENSCHMITT Altarm. Verbum, 1982,187³²)。)
- 10) heth. *tepnuzzi* 「小さくする、けなす、挫く」、ved. *dabhnōti* 「欺く、騙す」、aav. Inj. *d^hbānaotā* (< uriran. ^{*}*dbanaū-* < ^{*}*db^hṇnéū-*) 「君たちは欺く」Y 32,5。印欧祖語における ^{*}*d^heb^h* の意味を NARTEN Kl.Schr. 380–395 は “gering sein, gering machen” (fientiv-intransitiv und/oder fazientiv-transitiv) とし、‘vermindern’ > (indoiran.) ‘betrügen’ > ‘schädigen’ の展開を考える。
- 11) ZEHNDER LIV 133¹ もそう解釈。-u- による形成について、GOTÖ I.Präs.164²⁶², TICHY Nom. ag. auf -tar- (1995) 41 とその注、文献参照。当該語根の -u- による拡大形は aav. Y 31,17 *mā əuuiđuā* *d^hpī d^hbāuuaiiat* 「知らない者は、それなのに欺くことを止めよ」(< ^{*}*db^hāū-aiā-*), n. *d^hbaoman-* 「欺瞞、虚偽」(BARTHOLOMAE Wb 322 s.v. は複合語 *ā.dābaoman-* “Betörung” に解するが、KUIPER III 15, 1973, 200–204 を見よ: *ā... upā-jasat, upā* は aav. の pausa 形による) に見られる。STRUNK Nasalpräs. 66f. は *srāuuaiietī, srāvāyati* 「聞かせる」:: ^{*}*éǰnāū-*^{ti} (*sur⁺naotī, śṇōti*) 「聞く」、n. *sraoman-* 「聞こえ」への比例的類推を指摘。
- 12) その他 I 52,13 *satyām addhá nākir anyás t_vvāvān* 「事実、明確に(この通り)、君のような者は他に誰もいない」、III 54,5 *kó addhá veda ká ihā prá vocat* ¹*devām áchā path_vyā ká sám eti* 「誰がはっきりと知っているか、誰がここで(地上で)明言するか、どの道行きが神々へ向かって行き着くか」(X 129, 6 にも類似例)、VIII 101,11 *bān mahām asi sūr_vya* ¹

ai. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, jav. *abda-*, *dapta-*, 及び ai. *addhá*, aav. ap. *azdā* (後藤) (233)

*bád āditya mahām asi | mahās te sató mahimā panasyate*¹, *ddhá deva mahām asi* 「確かに君は偉大だ, 太陽よ, 確かに君は偉大だ, Āditya よ, 偉大である君の偉大さは称讃される. 明確に (この通り), 神よ, 君は偉大だ]. — RV, AV にはこの副詞からの派生名詞 *addhāti-* がある, 「確實明瞭であること」から「隠されたもの・ことを」はっきりと見ること」> 「はっきりと見る者」へと具体化されたものと考えられる: e.g. RV X 85,16 *d_vé te cakrē sūr_vye¹ brahmāna ṛtuthā viduḥ | athāikam cakram yád gūhā¹ tād addhātāya id viduḥ* 「君の二つの車輪を, Sūrya よ, 祭官学者たちは正しい時 [の巡り] に沿って知っている. だが, 隠れている一つの車輪, それを知っているのははっきりとものを見る者たちだ].

- 13) HOFFMANN Aufs. 348 Nachtr. (1976), GOTÖ Gs.Renou (1996[1997]) 83 と n.39 参照.
- 14) DB I 31f. *yaθā : Ka_v bujiya : Bardiya_v : avāja : kārahayā : naiy : azdā : abava : taya : Bardiya : avajata* 「Kanbujīya (カンピュセス) が Bardiya (スメルデイス) を殺害した時, B が殺害されたことは, 軍勢にははっきりしていなかった (事実上: 知られていなかった)], DNa 42f. *avadā : xšnāsāhay : adatāiy : azdā : bavāiy* 「そこで君は認識することになろう. そうすれば君にはっきりすることになろう」(45 行も同様), DNb 50 *marikā : daršam : azdā : kušuvā : ciyākaram : āhay : ciyākarama-ma-taiy : uvnarā : ciyākarama-ma-taiy : pariyanam* 「配下の者よ, 君がどのような種類の者であるべきか, 君のよい男振りたちがどのような種類のもの [あるべきか], 君の卓越性がどのような種類のもの [あるべきか], 決然と [自らに] はっきりとせよ」.
- 15) Y 50,1 ^(b)*kē mōi pasēuš¹ kē mā.nā θrātā vistō*^(c) *aniio ašāt¹ θpatcā mazdā ahurā*^(d) *azdā zūtā¹ vahišāatcā manaphō* 「誰が私の家畜の, 誰が私の護り手として見出されているか, 真理と君と, 主なる智慧よ一呼びかけの中にはっきりしている一, [そして] 善き思考と, 以外に」.
- 16) SZEMERÉNYI の反証はイラン語派に *ad* が無いという点に尽きるが, aav. の接続詞 *at* 「それから, かくて」, *ad-āis* 「そして彼らによって」(HOFFMANN-FORSSMAN 112, NARTEN YH 94f., 104) の背後に確認される.

(平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 C による研究成果の一部. 論述の詳細については T. GOTÖ Fs.Klingenschmitt [編集中] を参照されたい.)

〈キーワード〉 Veda, Avesta, *ádbhuta-*, *ádabdha-*, *addhá*, *abda-*, *azdā*, 語源, 音韻

(東北大学大学院文学研究科教授, Dr. phil.)

57. On the First Two Chapters of the *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad*: ŚB-Mādhy. X6,4-5~BĀU-Kāṇva I 1-2

Yoshiteru HAYASHI

The first two chapters of the Kāṇva-recession of the *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* Volume I are, in the Mādhyandīna-school, included not in the Upaniṣad portion (Volume XIV) of the *Śatapatha-Brāhmaṇa* but in Volume X of the text, i.e. “Agnirahasya (mysterious doctrine of the Agnicayana)”. In this article I point out that these chapters originally belonged to the Agnirahasya, showing that the wording and the logical construction are common to that of the Agnirahasya.

The main theme of these chapters is the overcoming of re-dying (*punarmṛtyú-*) through the Aśvamedha, and this is theologically explained with the interpretation of the relation between the Agnicayana, which is included in the Aśvamedha, and the horse sacrifice (*aśvamedhá-*).

These chapters can be understood only in a ritualistic and theological context, and so these points are especially discussed: 1) *arká-* denotes the fire altar of the Agnicayana. 2) “Death (*mṛtyú-*)” symbolizes not Prajāpati as has so far been supposed, but the sun and at the same time the golden Puruṣa (a figure) used in the Agnicayana. 3) This theological interpretation is based on and developed from the Brāhmaṇa interpretation of an oblation (*arkāśvamedháyoḥ sāmṭati-*) which is performed in the Agnicayana.

58. OIA. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, YAv. *abda-*, *dapta-*, and OIA. *addhā*, OAv. OPers. *azdā*

Toshifumi GOTŌ

Old-Indo-Aryan *ádbhuta-* ‘mysterious, miraculous, wonderful, marvelous’ is a common adjective since the Ṛgveda. The word is, undoubtedly, derived from a negated verbal adjective of the root *dabh* ‘to deceive’, as already shown by K. Hoffmann. Another verbal adjective form is found in *á-dab-dha-* ‘not (to be) deceived’. The Proto-Indo-Iranian form is supposed to have

been *(á)dbd^ha- (< *-d^hb^hta- through Bartholomae's rule) on the basis of Young Avestan *abda-* 'wonderful'. OIA. *á-dabdha-* and JAv. *dapta-* 'deceived' are innovated by introducing the full grade root form. In the case of *ádbhuta-*, the root consonants as well as the formant *-ta-* are reserved by *-u-*, which is gained through the re-interpretation of the pres. **db^hnáy-/db^hnu-* as a *-n-* infix-present **db^hnáy-/db^hn-u-*. The original meaning is held by *á-dabdha-* and *dapta-*, which seem to be younger forms, while somewhat older *ádbhuta-* and *abda-* are charged with the derived meaning. Also the adverb OIA. *addhá* and OAv. OPers. *azdā* 'obviously, clearly' are examined, considering the problem of simplifying the three plosives group. They go back most probably to **ad* 'this' + *-dhā*, in spite of the common opinion today. (Detailed discussions are to be published in German in Fs. Klingenschmitt.)

59. The Causal Distinction of Cognition in *Praśastapādabhāṣya*

Hirofumi MIURA

Praśastapāda, who organized the Vaiśeṣika philosophy, constructed his epistemology following in the tradition of *Vaiśeṣikasūtra* (A.D.1c.). He also adopted the causal theory of non-existence of effects (*asat-kārya-vāda*) in his epistemological system. In this paper, the author intends to consider the relationship between Praśastapāda's epistemology and causality in his main work, *Praśastapādabhāṣya* (A.D.6c.).

We can see the three kinds of causes in *asat-kārya-vāda*. The first is the intimate cause (*samavāyi-kāraṇa*), the second is the non-intimate cause (*asamavāyi-kāraṇa*), the third is the efficient cause (*nimitta-kāraṇa*). These causes and their expressions correspond to the distinction of cognition in Praśastapāda's epistemology.

In direct cognition (*pratyakṣa*), non-intimate cause is the contact with *ātman* and *manas*, and efficient cause is expressed with the term *apekṣa*. But non-intimate cause means to see the sign (*liṅga*) in inference (*anumāna*). In memory (*smṛti*), non-intimate cause also means the ⟨special⟩ contact with *ātman* and *manas*. In the saint's cognition (*ārśajñāna*), both causes are ex-